

私は差別をしたことはありません。
なぜ部落差別はなくなるのでしょうか。
私は何をすればよいのでしょうか。

というところ、他の方の幸せの先に自分の幸せを見るという視点には程遠く、常に自己中心的で狭い視野にとらわれていることを、日々のお聴聞の中に知らされることです。話し合い法座ではこういった気づきや考え方の転換を度々体験していくことと思います。凝り固まった自分の考えにとらわれることなく、できるだけ広い視野で問い8と向き合っていきたいと思えます。

問い8には「私は差別をしたことはありません。なぜ部落差別はなくなるのでしょうか。私は何をすればよいのでしょうか」とあります。「お寺でなぜ差別

レッツ!

真宗

連研

12の問い
〈8〉



中川 大城
(研修講師)

なぜお寺で差別問題？

「連研12の問い」についてのこのコーナーも、その8となりました。問いの連続性(繋が)りを大切にしたいと思えますので、問い7の「自分だけが幸せでよいのでしょうか」について、もう一度振り返ってみたいと思います。

幸せについて考えてみますと、私は幸せだと感じている時でも、自分だけの幸せというところで留まり、それをいくら掘り下げても、他の方の幸せには目が向いていないことに、この問いを通して気づかされました。もっ

問題の話を？」と思われるかもしれない。そう感じるのも無理もないことです。とにかくご信心のお話を聞いてほしいと勧めてきたのは僧侶です。そして煩惱がある以上、差別はなくならないとして、差別を受け、傷つく人々を置き去りにし、そこから目を逸らし、見ないように(見させないように)してきたのは僧侶です。だからこそ私自身がまず、この問いとして向き合う必要があると痛切に思っています。

私自身が慚愧すべき

まず、差別についてですが、

私は差別をしたことはありません。
なぜ部落差別はなくなるのでしょうか。
私は何をすればよいのでしょうか。

凡夫^{ぼんぷ}」であると、仏さまは私を照らし、知らしめておられるのです。煩惱がある限り差別はなくなるのではないのではなく、差別して生きてしまう自分に「恥^{はづかし}ずかしい」「申し訳ない」と慚^{ざん}愧^きすべきなのだと気づかされました。

親鸞聖人は仏法を通して、どこまでも自身に厳しい眼差し^{まなざし}を向けて生き抜かれた方でした。だからこそ私たちもお聴聞の中に、自らを問い続けるという

ことを忘れずにいたいのです。私がずっと問われ続けているのだ、その立場で生きていくことが、差別と向き合うことなのだと私は思います。

いのちの本質に差別なし

仏さまは生きとし生けるもの全てを幸せにしたいと願ってくださいます。自分だけが幸せであるということではなく、他の人の幸せの中に自分の幸せを見ることができれば、どれほど豊かな人生を送ることができのでしょうか。全ての人が差別のない、幸せに暮らせる社会であってほしいと思います。

長く「同和」教育に携わってきた川内俊彦氏は「正当な理由もなく、一方的に、ひとしく、しあわせに生きたいという願い、要求をふみにじり、ことさらに物事の道理を歪^{ゆが}め、不平等な取り扱いをして不利益を強い、人間の尊厳^{そんげん}（誇り）を傷つけ、いやしめ、辱^{はづかし}めること」（『社会【同和】教育実践の手引』）と規定されています。人はみんな幸せになりたいと願っているのに、部落差別をはじめ、なぜ差別はなくなるのでしょうか。

した人の側から気づくことは少なく、往々にしてされた側からの叫びや告発によって知られることが多いのです。もちろん全ての人が声を上げられるわけではありません。それほどに傷ついているからです。これ以上気づかず相手を傷つけ続けるわけにはいきません。だからこそ過去の差別の事例から学び、差別を見抜く力を養う必要があるのだと思います。

そしてもっと言うならば、気づけない差別がある以上、差別をしてきた、していないということではなく、意識はせずとも差別してしまう私と向き合っ

いかねばならないということなのです。

「煩惱具足の凡夫^{ぼんのうぐそく}」という親鸞聖人のお言葉が『歎異抄^{たんいしやう}』に出てまいります。これは煩惱から離れることができない衆生の姿^{しゆじょうのすがた}を示すと受け止めていましたが、どれほど我が身に引き当てて聞いてきたでしょうか。煩惱から離れることができないことは「恥^{はづかし}ずかしい」ことなのです。仏さまのお話を聞くと、「もったいない、ありがたい」と感じることは多くても、自身が「恥^{はづかし}ずかしい」という視点にはなかなか立てません。無慈悲な生き方を悩み煩^{わづら}う姿こそ「煩惱具足の

仏さまの教えを聞かせてもらう中に、いのちの本質に差別はないことを知らされました。しかし、人間社会に生きる中に、私は不条理な差別を行い、痛み、苦しみ、悲しみを与えて相手を傷つけ続けて生きています。他の誰でもなく、まず私がそこから解放されてこそ、差別の現実^{げんじつ}は変えていけるのだと思います。

私は、差別が嫌いです。することもされることも我慢できません。だから「差別はなくなる。必ずなくすのだ」という強い気持ち^{こころ}を胸に刻んで生きていきたいと思えます。